

『大切なのは  
活きた経験』

KOJI KAJIWARA

1965年生まれ。日田林工高卒。大阪府の会社で金属加工に従事後、日田市へ戻り、技術者として愛知県と行き来しながら自動車部品用の機械製造などを手掛けてきたが、31歳で実家の農家を継ぎ、トマトの水耕栽培も開始。1998年に「観光農園トマトファーム」を開き、農業を控えた栽培や加工にも力を入れる。



「日々は選択と決断の連続です。その積み重ねがやがて一年経って、十年経って、きつと知らないうちに皆さん一人ひとりの大きな財産になっていきます。間違いかどうかなんて未来の自分が決めること。だから皆さんがどう行動し、何を経験するかが一生を決めるのだと思います」。自家製トマトジューズを片手に自身の過去の経験を思い返す。そして今の自分は確かに、「活きた経験」が作ったものだと言胸を張って言い切った。これからの日田を担う若者へ向けたメッセージだ。

高校卒業後、大阪に移り、モノづくりへの関心からエンジニアとしての道を選んだ。日田へUターンした後も、会社員として自動車パーツの製造に従事した。31歳で家業のブドウ園を継ぎエンジニアから農家へ。フルーツトマトの味に感動し、トマト農家への転身を決意したのはそれから1年後のことだった。「当時、トマトを育てるには自分の体力と農薬に頼るのが一般的でした。時代の『あたりまえ』の前に、果たして美味しいトマトが作れるのかと最初は悩みました」。

それを解決したのが、エンジニア時代に経験した機械管理の考え方だった。「ハイポニカ水耕栽培」という水や養分を機械によって供給する栽培システムに挑戦し、ほぼ無農薬のトマト栽培が実現。寒暖が激しい日田の気候を生かして育てるフルーツトマトは糖度が高いと評判になり、今では遠方からの来場者も多い。「機械技術者から農家。大きな転機のようにだけど、やっていることは似ているから面白い」と笑う。

目標がある。農業従事者が減っていく、企業や大規模農家の参入でますます個人の経営努力が必要になっていく中で、いかに新しく持続可能な農業を日田から完成させていくか。そのために新しいことに挑戦をする姿勢は、日田で働くプライドがあつてこそ。この農園を日田に選んだ理由は、自分が生まれ育った場所だからだけではない。人の距離が近く、自然と人脈が広まる風土だったから。周りの人々に助けられた経験もたくさんあつたと語る。日田だったからこそ、新しいチャレンジが実を結んだのかもしれない。

どう行動し、何を経験するか。その蓄積こそが、未来への希望を作って自信になり、背中を押してくれるもの。「情報に溢れた時代だからこそ迷ってしまいます。でも行動を起こさないと実感できないものの方が多い。まずは外へ出て、たくさん活きた経験をしてみては」

